

程順則『指南廣義』と島名の音義

和文要旨

尖閣は西暦千八百四十五年に英國軍艦が八重山パイロットの導航のもと命名した島名である。英國軍艦の日誌には同時に「Tiaiyusu」（釣魚嶼）など清國漢字音の島名が記載されたが、もとは西暦千七百五十一年に佛人ゴービルが標したローマ字である。ゴービルは吐噶喇七島をも清國字音で記載しながら「日本に屬する」と注記してをり、清國字音は清國領土を標示するのではない。ゴービルがもつづいた清國『中山傳信録』は、琉球の程順則の『指南廣義』にもとづいてをり、全面的に琉球側の提供知識に依頼してゐるが、明治政府は氣づいてゐなかつた。

西暦千八百三十二年にはドイツのクラブプロート氏が日本漢字音で釣魚臺を「Tsioghoortai」と記載する。

西暦千七百九十五年、土佐藩『下田日記』には、琉球人が『中山傳信録』の釣魚臺を和語「いよこん」と訓じたことを記録する。「いよ」は魚の古語である。「いよこん」と「こばしま」（久場島）との組合せ形式の起源は西暦千七百五十一年琉球家譜、乃至江戸時代初葉にまで遡り得る。

釣魚「臺」出現以前、釣魚「嶼」の最古の史料は西暦千五百三十四年に明國陳侃が琉球の役人の水先案内により記録した。その三つの島名「釣魚嶼・黄毛嶼・赤嶼」は、後の琉球側の「いよこん・こばしま・あかしま」と暗に符合する。もともと琉球和名を漢文に譯した可能性が高い。

キーワード：指南廣義

程順則

イヨコン

いしゐのぞむ

近年の考古學によれば、元寇前後から琉球に輸入され始めた福建粗製白磁は、明國初期に至って宮古八重山で減少に轉じ、沖繩本島で急増する。この時代、琉球王府の統制は八重山に及んでゐないため、八重山の貿易を減少させた壓力は明國側に在ったと考へるべきである。

明國初期洪武四年九月までの福建側史料では一貫して琉球沖繩の實相を渺茫不可知なるものとして記述する。福建商人が琉球各島を歴年巡回して行商したとは考へられない。洪武帝は諸外國に遣使しながら、琉球にだけは遣使できず、洪武四年九月に詔を下して、琉球は阻山越海の地だから諦めよと述べる。

ところが翌十月、日本から使者楊載が戻ると、わづか三個月後の洪武五年正月に同じ楊載を琉球（沖繩）に派遣する。この速断速決のわけは、日本内地で沖繩情報を得たか、乃至沖繩人に出逢ひ、これを伴って南京に歸國したのでらう。

かかる未知の沖繩に急遽渡航するには、情報を得ただけでなく琉球の導引役（パイロット）が水先案内する必要がある。かりに福建人が導引できるならばもともと遣使困難のはずがない。琉球通事梁應の記録によれば、楊載は沖繩からの復路だけ福建人に案内させたので、沖繩への往路は沖繩地元人が導引したと考へられる（いしゐのぞむ「古琉球史を書き換へる」、『純心人文研究』第二十八號、令和四年）。

三山諸王が福建貿易を獨占して以後、八重山に密貿易の形跡は見られない。石垣島の名藏灣では青磁白磁が集中的に發掘採集されてゐるが、先島文化研究所の大濱永亘（えいせん）氏は長年にわたりこれを研究し、現在

では西暦十五世紀後半の漂着船の一括遺物であることが定説となつてゐる。名藏灣に密貿易の形跡は無いといふ（先島文化研究所『名藏シタダル海底遺跡共同研究報告書』、平成二十一年）。

これ以後薩摩統治下の近世まで、石垣島はチャイナと直接貿易できなかった。ところが西暦千七百八年の程順則『指南廣義』には琉球船が福建に渡航した際の復路の一つとして八重山が「北木山」、宮古が「太平山」と記載されてゐる。福建粗製白磁の減少を以て大勢を見れば、これは朝貢開始より以前の極めて古い航路である。

『指南廣義』文中には久米唐人の元祖（西暦十四世紀末）から繼承された航路だと述べてゐるが、その記述は考古學によつて俄然眞實味が出て来る。もともと久米唐人は尖閣航路を知らず、琉球の地元人が教へたと考へられる。

北木を福建南部字音で「パボ」と読み、毒蛇ハブ（パボ）と同音である。先島諸島の内、石垣・西表及び中間の竹富などにはハブが多く、離れた波照間・鳩間・與那國・多良間・宮古にはハブが棲息しない。近代以前の西表は人の居住が少なく、人の主な居住地としては石垣島が代表的なハブ棲息域である。北木山とはハブの島であらう。且つ石垣島北部は山林であるから、北木は北林の語義を兼ねて音義雙關かも知れない。

宮古島は『指南廣義』より以前から首里宮殿百浦添の欄干の古銘などで「太平山」と記載される。宮古の中心地平良は蔡温『中山世譜』首卷に「庇郎喇」と記載され、古來ひららと讀む。近代の慶世村恆任の名著『宮古史傳』に、平良は高山の無い平らな島を言ふとの語源説があり、漢文名「太平山」は平良の語義もしくは地勢にもとづくだらう。なほ古語「たびらか」（平らか）の「たび」は太平の唐音と近似するので、太平山は「ひららか」でなく通常語「たびら」の音義雙關の可能性もある。

慶良間の唐名馬齒山は陳侃『使琉球録』に既に見えるが、小松勝氏は馬齒のチャイナ字音「マーチー」にもとづき「待ち島」だとした。李鼎元も慶良間で風待ちしてをり、この見解は至當だらう（小松勝「馬齒山覚え、

漢字假名について」、『琉球大學經濟研究』第三十五號、昭和六十三年）。

但し慶良間は渡嘉敷、座間味、阿嘉島、外地島で内海を圍み、南に開く地勢が馬顎の三方の齒に似る。慶良間の安護の浦は顎の義かも知れない。

明國愼懋賞『四夷廣記』（玄覽堂叢集第九十二冊）の「兵庫港より琉球並びに漳州に回る針位」の條に島を列すること次の如し。

琉球港口（那霸）―南西―溪刺麻―西南西―平郡邑是麻―西北西―粘米山。平郡邑は亞郡邑（あぐに）の形似であらう。是麻はしまである。しかし西北の粟國島に向けて西南西は方角外れなので疑義を存する。粘米山は粘米山、久米島である。

溪刺麻（慶良間）に曰く、「溪刺麻の山尾を取る、雙連して平平なり」と。慶良間の尾部即ち南部が東西に列して平坦なるを言ふ。確かに外地島は渡嘉敷南部と東西に並んで平坦である。されば馬齒山は待ち島と馬の齒と音義雙關となり得る。

尖閣の黄毛嶼（久場島）もまた黄毛が K o n g i B o 即ち「こぼう」と模擬し得るので、黄毛の群毛と音義雙關である。されば琉球諸島の西部の馬齒山、太平山、黄毛嶼、北木山等の唐名には音義雙關といふ法則性を見いだし得るのではないか。

『玄覽堂叢書續集』第九十四冊『四夷廣記』琉球章の「琉球國船、暹羅に往くの針路」の條は、崑崙山（越南最南部のコンダオ島）から暹羅まで記載するが、航路上で涼山嶼、赤龜礁、野猪嶼、仙髻山、海潮門などの地名は他のチャイナ人の航路簿に見られず、琉球船の独自の航路となつてゐる。

越南南部から暹羅までの沿岸はチャイナ人の航路とさほど違はない筈であり、那覇久米村の人々は祖先が福建出身であるから、福建人よりも後に暹羅に進出すれば福建人と同じ地名及び航路を用ゐたであらう。よつてこの琉球船の航路は福建人よりも早い。琉球船の航路が琉球からでなく崑崙山から始まるわけは、この時代まで琉球航路を秘傳して洩らさなかつたのだらう。

この航路について論及したのはエルケ・パペリツキ（唐名林柯）女史である。Elke Papelitzky『Sea Routes to Thailand Described in Chinese Texts of the Ming Dynasty』明代中國史料中的暹羅航線探微』『絲路的延伸、亞洲海洋歴史與文化』所收、平成二十七年中西書局。

女史は愼懋賞が崑崙山について無知だったとして、もとづく原本の脱誤に気づかなかったと推測してゐる。しかし崑崙とは東南アジアの古稱であり、崑崙山も東南アジア航路の代表的島名である。愼懋賞は『四夷廣記』で國外地理情報を集めた以上、琉球から崑崙山までの遙かな懸隔について無知ではあり得ない。古人の無知や古典の脱誤を判定するならば相應の根拠が必要である。

琉球は強兵衆武を擁せずして遠くマラッカまで通商できるはずも無く、航路を外敵に教へるはずもない。逆に言へば、後の時代まで情報が缺乏した領域こそが琉球の秘密勢力域であらう。そこに尖閣が含まれる。

西暦千六百八十三年、清國の汪楫は琉球役人の導航を待つを要せずと述べながら、琉球人に導航させ渡琉した。秘密主義の琉球海洋覇権を史上初めて侵犯しようと試みたのである。案の定、汪楫船中では琉球人と福建人との間で航路争ひが起こり、結果として琉球人の主張する高速航路を汪楫は採用した（石平『眞實の尖閣史』、扶桑社、平成二十九年）。

その四半世紀後、程順則は『指南廣義』に福建側の主張する尖閣航路を併載し、低姿勢で福建側を尊重してみせた。しかしこれを贈呈された徐葆光は程順則の批判の意圖を察知し、漢詩「雪堂程大夫禮成歸國、奉送出都」及び『中山傳信録』の中で『指南廣義』の航路を強く非難した。程順則が清國を尊重したのは表面だけに過ぎない。

『中山傳信録』は『指南廣義』の二種の釣魚臺航路の内、清國主張の針路を採用した。自國船の針路争ひで自國主張の針路をわざわざ琉球側の書から採用したのは、徐葆光が釣魚臺を琉球附屬島嶼と看做したことを示す。

さらに『中山傳信録』巻四の太平山條でも釣魚臺に言及して曰く、「福建より太平山に至るは、東湧より開船して釣魚臺に至り、北風に

單卵の針と乙辰の針を用ゐて達すべし。」

と。これは『指南廣義』の琉球側主張の部分から採録してゐる。釣魚臺太平山航路情報を清國側は有せず、ゆゑに採用せざるを得なかったのである。『中山傳信録』の原本は徐葆光が上奏した『冊封全圖』及び『琉球全圖』である（孫欲容「徐葆光琉球國貢全圖與清代琉球形象的建構」、平成二十八年『中國文哲研究通訊』第二十六卷第一號）。『琉球全圖』にも同じく釣魚臺を経て太平山針路のほぼ同文が載つてゐる（麻生伸一・茂木仁史編『冊封琉球全圖』、雄山閣、令和二年。原本は北京故宮藏）。徐葆光の認知は公式見解である。

以上に關聯して、拙作「尖閣島名の淵源（下）」を日本國際問題研究所領土歴史センターに寄稿し、令和四年三月三十一日に公表された。インターネット版であり、永久保存を保證し得ないので、以下に原文のまま一字も改めずに轉載する。衍誤脱字は校正しない。

全文URL：<https://www.jiaor.jp/jic/20220530.html>

なほ同じく寄稿上篇は長崎純心大學『純心人文研究』第二十九號に掲載する。

尖閣島名の淵源（上）

〔成果概要〕

島名始出の時まで遡る

昭和四十三年、尖閣海底油田が初めて報じられ、翌昭和四十四年（西暦千九百六十九年）、中華人民共和國の公式地圖には「尖閣」二字が刻まれた。原版地圖を千葉明駐ASEAN大使が藏してゐる。

尖閣は西暦千八百四十五年に英國軍艦が八重山パイロットの導航のもと命名した島名である。英國軍艦の日誌には同時に「Tiaiyusu」（釣魚嶼）など清國漢字音の島名が記載されたが、もとは西暦千七百五十一年に佛人ゴービルが北京で清國人所著の琉球地誌を佛譯した際に産まれ

たローマ字である。ゴービルは吐噶喇七島をも清國字音で記載しながら「日本に屬する」と注記してをり、清國字音は清國領土を標示するのではない。ゴービルがもつた清國『中山傳信録』は、琉球の程順則の『指南廣義』にもとづいてをり、全面的に琉球側の提供知識に依頼してゐるが、明治政府はそのことに気づいてゐなかつた。

西暦千八百三十二年にはドイツの東方學研究家クラプロートが日本漢字音で釣魚臺を「Ts i o o g h i o o t a i」と記載する。このたび東京大學藏本、國會圖書館藏本を複製することができた。

西暦千七百九十五年、土佐藩の『下田日記』には、琉球人が『中山傳信録』の釣魚臺を和語「いよこん」と訓じたことを記録する。「いよ」は魚の古語である。「いよこん」と「こぼしま」（久場島）との組合せ形式の起源は西暦千七百五十一年琉球家譜、乃至江戸時代初葉にまで遡り得る。

釣魚「臺」出現以前、釣魚「嶼」の最古の史料は西暦千五百三十四年に明國陳侃が琉球の役人の水先案内により記録した。何びとが命名したか未詳だが、早期の三つの島名「釣魚嶼・黄毛嶼・赤嶼」は、後の琉球側の「いよこん・こぼしま・あかしま」と暗に符合する。もともと琉球和名を漢文に譯した可能性が高い。

この外、朱印船時代の尖閣島名に「トリシマ」及び「レイシ」があるが、本寄稿では扱はず、別稿で論じる。

〔詳解〕

〈昭和四十四年福建地圖が「尖閣」島名を記載〉

昭和四十四年（西暦千九百六十九年）、國家測繪總局は『中華人民共和國分省地圖』を製作した。その中で福建省の一幅に尖閣諸島が畫かれてをり、目下千葉明駐 ASEAN 大使及び北京國家圖書館が收藏する¹。平成

二十七年（西暦二千十五年）二月二十三日、原田義昭議員は衆議院預算委員會の質疑で外務省に最も根據ある史證として當該圖を採用するやう要求し、外務省はこれをインターネットページに列した²。

この圖は西暦千九百六十八年に尖閣海域の石油探査事業の消息が明るみに出て後に完成したもので、圖の枠は破格に尖閣の東まで擴げられてをり、新國境線を主張するかの如くだが、惜しくも圖中の島名は舊來通り尖閣となつてゐる（圖一）。後に人民共和國は公式島名に釣魚島を採用し、この圖との矛盾をも顧みずに「日本は釣魚島を尖閣列島と改名した」としてゐる³。

圖版一

中國測繪總局『分省地圖』
尖閣群島張り出しの部分。

平成二十七年三月、
NHK ニュースより。



¹ 北京國家圖書館に二幅を藏する。認證番號はそれぞれ 912001010198 及び 009127685。附註に「秘密級圖」とする。

² <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/senkaku/pdfs/senkakupdf>

³ 國家海洋信息中心『釣魚島 中國的固有領土』、海洋出版社、平成二十四年九月。

この圖を研究する際、三側面に焦點をあてる必要がある。第一に人民共和國は如何にして海底油田の消息を早期に入手したか。第二に諸家の尖閣海域地圖中で歴來國境線はどうだったか。第三にこの圖の尖閣島名は如何にして産まれたか。本稿は先づ第三の問題即ち島名史を論じる。目的は近年かの國による歴史捏造を指摘することに在り、島名を以て主權を定めることを意圖しない。

〈八重山人の導引下で産まれた尖閣の名〉

昭和四十四年地圖より以前、大正九年（西曆千九百二十年）に中華民國駐長崎總領事が八重山の尖閣と呼んだことは著名である。さらに清國使節傅雲龍（ふうんりゅう）が明治二十二年（西曆千八百八十九）年に刊行した『游歴日本圖經』日本地理六「島表」に「尖閣郡」の名が見える。尖閣群（島）からの誤記と考へられる。

さらに遡れば西曆千八百四十五年六月中旬、英軍ベルチャー船長のサマラン艦が尖閣を探查し、航海録は西曆千八百四十八年に刊行された。⁴ その中の「Pinnacle」（屋上の尖塔）が尖閣命名の元である。

航海録では「Hoapinsan」（和乎山、花瓶山、今の魚釣島）について述べて曰く、

「八重山のパイロット若干名は、この島名を以ては知らなかった」と。また曰く、

「今までこの附近の充當地名の認定は倉卒に過ぎた」

と（圖版二）。これは八重山の案内人が「Hoapinsan」でなく地元の島名で尖閣を認識してゐたことを示す。認定を急ぎ過ぎたとは、地元島名を正式認定すべきだとの意である。八重山こそが尖閣の所在地區

⁴ 『Narrative of the voyage of H. M. S. Samarang, during the years 1843-46』 Edward Belcher 著、Benham and Reeve 刊、西曆千八百四十八年版第三百十五至三百二十頁。

圖版二

Edward Belcher

『Narrative of the voyage of H. M. S. Samarang』
第一冊、第三百十五頁、
西曆千八百四十八年、
Benham and Reeve 刊。

Quitting Y-nah-koo, which is conspicuous from the sea by the peculiar sharpness of its single peak, we returned to Port Haddington, to rate, and sailing the same evening, shaped our course in search of the group Hoapin-san of the charts; although not known by this name by our Pa-tchung-san pilots. Indeed, we found that the names assigned in this region have been too hastily admitted, as may be remarked in Meia-co-slimah and Y-nah-koo, for Madjicosima and Kumi.

だと、英國の將軍らが認識したことが分かる。しかし北京清華大學の劉江永氏は、文中の「知らなかった」の語だけを切り取って「八重山人は尖閣を知らなかった」との虚構を内外に散布し、國家海洋局の釣魚島特設サイト採用されてゐる。⁵

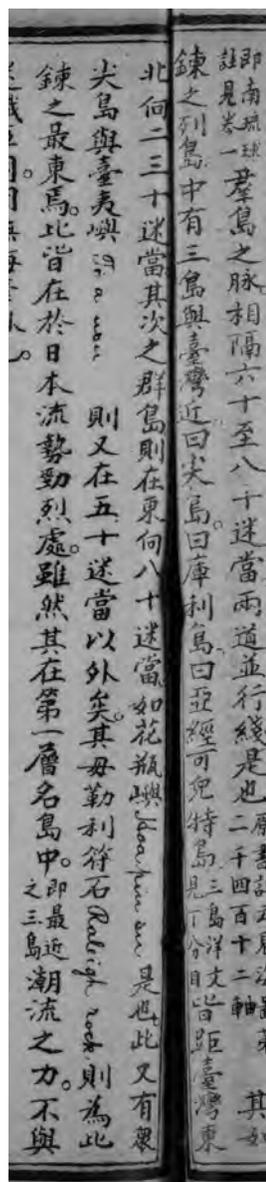
この時、サマラン艦はチャイナ人を通事として伴つてゐたことを記録してゐる。⁶ 國外の唐人であらう。同一の船中に八重山人と唐人とがあり、八重山人が尖閣海域を導引し、唐人は尖閣について何もしなかった。この唐人は自然と船が八重山人の水先案内で尖閣に往つた事實を目睹し、必然尖閣は八重山文化圏内の島だと理解したであらう。サマラン號は清國領土に近づかない原則で航行してゐたが、八重山の北に遠からざる處に清國の領土が存在するとは、この唐人も萬に一つも思ひ寄らなかつたらう。

八重山パイロットの案内のもとで英國海軍が南北小島に「Pinnacle」と名づけ、後の人がそこから尖閣と譯した。現存資料では日本海軍『臺灣水路誌』（明治六年、西曆千八百七十三年刊、柳愷悦編）に尖閣の名が最も早く見える。この書は日本を離れてから臺灣までの航路を記述した

⁵ 劉江永「日本官方承認釣魚島屬於中國之證據考」、『國際政治科學』、平成二十八年（西曆二千零六年）第二期。

⁶ 西曆千八百四十八年版第三百二十一頁。

⁷ 詳しくは、いしゐのぞむ『尖閣反駁マニュアル百題』、第三百六十七頁、集廣舎、平成二十六年。



圖版三 陳壽彭『新譯中國江海險要圖誌』卷十一（英文原卷五下）の「衆尖島」。底部に衆、頂部に尖島。經世文社刊、封紙背に光緒二十七年（西曆千九百一年）と署す。國會圖書館 558.7-1147.1。

もので、臺灣島南岸わづか十五キロメートルに位置する七星岩を載せないため、臺灣附屬島嶼の範圍を記述する書ではないと分かる。日本から臺灣までの航路では七星岩を経由しないから記載しないのである。

のちに明治三十四年（西曆千九百一年）の清國『新譯中國江海險要圖誌』卷十一（英文原卷五下）では、南北小島の英文 Pinnacle 群島を「衆尖島」と譯す（圖版三）。この衆尖島もまた八重山人が水先案内した結果として産まれた島名からの譯名である。ここで注意喚起すべきは、書目に「中國」と言ひながら書中には呂宋等外國を含んでゐる。

普通名詞としての Pinnacle は、ロプシャイト氏『英華字典』（明治元年、香港デیلیプレス社刊）第千三百十九頁に尖閣と譯されてゐる（圖版四）。傍らに廣東字音「Tsím Kok」も注してある。

「閣」は二層の樓もしくは樓上の小室を指し、東アジア通用の漢文であるが、廣東では特に日常に頻出し、語尾を附して「閣仔」とも呼ぶ。雜誌ペントハウスも香港流儀で「閣樓」と譯されてゐる。

⁸ 詳細は鄙著「歐洲史料尖閣嶺祭録」第二十二回及び二十三回、平成二十八年三月二十九日及び三十一日、『八重山日報』。

圖版四

ロプシャイト (Robscheid)

『英華字典』、

明治元年、香港デیلیプレス社。

第三冊、第千三百十九頁、

Pinnacle を尖閣と譯す。

pan. san pau.
; Pinnacle, a slender turret, 尖閣 tsím kok, koh; summit, 頂 teng. Ting, 頂 tin. Tie pinnacle of a temple, 殿頂 tin' teng. Tien the pinnales of glory. 殿頂頂高 shing k'at

他の同時代の字典に塔尖や尖頂などの譯語は有るが、「尖閣」は見つからない。明治六年『臺灣水路誌』編者はロプシャイト氏香港原版で英語を學んだ可能性が高い。

〈西曆千八百四十五年の釣魚嶼の名は琉球側から〉

Pinnacle 以外にベルチャーはまた「Hoai-pin-san」と「Tiaiyusu」を記載する。それぞれ釣魚嶼と花瓶山の清國北方官話音であり、フランス宣教師ゴービルの擬音より出る。

ゴービルは長期間清國北京で布教し、その間に徐葆光の『中山傳信録』をフランス文に譯してパリに送った。西曆千七百五十一年のことである。

⁹ 後に明治十二年刊津田仙『英華和譯字典』はロプシャイト氏原書にもとづき編纂され、同じく普通名詞 Pinnacle の譯語尖閣を収録する。詳しくは「尖閣は中国語だった、デジタル化史料で読む尖閣命名と翻訳の歴史」、犬大将著、平成25年7月4日、インターネット「Kinbricksnow」掲載。

<http://kinbricksnow.com/archives/51863445.html>

その中の琉球圖では官話音で「Hoai pinissu」、「Tiaooyuissu」、「Hoanioyeyissu」（黄尾嶼）及び「Tcheioyeyissu」（赤尾嶼）等的那覇福州間の島名を記載してをり、歐洲の地理學界でひろまり始めた。¹⁰

徐葆光の記載でこれらの島嶼は西から東へ直線的に列せられるのみで、臺灣北方諸島と尖閣諸島とがそれぞれ一群を成して分かれてゐることを徐氏は理解してゐない。ゴービルは更に早期の琉球録諸本をも参照してゐるが、やはり辨別できず、花瓶嶼と釣魚嶼とを一緒に描き、黄尾嶼をそこから遠くに置いてゐる。これ以後歐洲の諸家はみなゴービル系列の地圖を依據とし、ラペルーズに至る。

西暦千七百八十七年、フランスの航海者ラペルーズは遠く東アジアに航海し、著名な紀行『ラペルーズ航海録』をのこした。¹¹ 尖閣に到達した際には島形を描き、緯度を計測してゐる。また臺灣島以東の諸島は尖閣を含め全て琉球に屬するとした。ラペルーズの手元ではゴービル系列の地圖を依據としてをり、幾分か惑ひつつも「Hoai pinissu」を魚釣島に擬し、「Tiaooyuissu」を久場島に擬してゐる。¹² それ以後ラペルーズの計測位置は歐洲の地理學の主流となる。西暦千八百四十五年にベルチャーがもつづいた兩島名はまさにラペルーズ系列に屬する。

ゴービルがもつづいた徐葆光の『中山傳信録』は、全面的に琉球の大夫程順則が提供した地圖・官制・針路等の情報に頼つて撰せられた（巻一及び巻四、巻五に見える）。徐氏が尖閣航路を記述する際も西暦千七百八年の程順則『指南廣義』所載の「釣魚臺」の名を採用してゐる（巻一及び巻四に見える）。

程順則以前、釣魚臺はもと釣魚嶼に作り、最も早い記録は西暦千五百三

¹⁰ 詳細は鄙著「歐洲史料尖閣瀬祭録」第一回、平成二十八年一月十四日、『八重山日報』。

¹¹ 「Voyage de La Pérouse」。詳しくは鄙著「歐洲史料尖閣瀬祭録」第三回、平成二十八年一月二十一日、『八重山日報』。

¹² 詳しくは、いしみのぞむ『尖閣反駁マニュアル百題』、第三百九十九頁。

十四年の明國陳侃『使琉球録』である。陳侃の記述によれば、福州出航前に琉球航路の知識が無く困惑してゐた時、琉球側が福州まで使者を派して迎へた。陳侃は大いに三度喜び、やっと琉球の官員の導航下で出航し、航路上で釣魚嶼を記載したのである。

島名の沿革を通観すれば、西暦千五百三十四年陳侃の釣魚嶼から、千七百八八年程順則の釣魚臺を経て、更に徐葆光、ゴービル、ラペルーズを経て、ベルチャーが八重山人の導航下でPinnacleを命名するまで、全て琉球情報に頼つてゐる。そこから分かるのは、尖閣諸島は古來琉球文化圏に屬し、英國、佛國、清國、明國の歴代人物はみな脇役に過ぎない。

明治十八年、日本政府が尖閣諸島を調査する前、沖繩縣令西村捨三は政府に報告を提出し、「清國の『中山傳信録』は既に釣魚臺と命名してゐる」とした。¹³ 西村氏が気づかなかつたのは、『中山傳信録』巻一の「針路」條で採用された釣魚臺の『指南廣義』は、琉球人程順則の著作なのである。鹿兒島史家伊地知貞馨の『沖繩志』巻一でも『中山傳信録』から『指南廣義』釣魚臺針路を重引しながら、やはり作者が程順則だとは注記してゐない。¹⁴ 『指南廣義』は福州で出版され、日本國內の藏本は極めて稀観のため、西村氏は作者が琉球の著名人程順則だとは知らず、釣魚臺を清國人の命名だと勘違ひしたのであらう。明治政府の杞憂は毫厘千里の差が招いたと言へる。

〈魚釣島の別名「和平山」の語源〉

尖閣魚釣島は明治政府官製地誌中に今一つの島名「和平山」がある。「Hoai pinissan」に充てた清國音漢字であり、もとは江南製造局官製『海道圖説』に見える。¹⁵ この書はジョン・ウィリアム・キング『Ch

¹³ 「久米赤島外二島取調ノ儀二付上申」（官房甲第三十八號別紙甲號第三百十五號）、外務省外交史料館藏『帝國版圖關係雜件』一四一―一七。

¹⁴ 伊地知貞馨『沖繩志』、重野安繹校、明治十年石川氏刊本。

¹⁵ 詳細は鄙著「歐洲史料尖閣瀬祭録」第二十八回、平成二十八年四月二十六日、『八重山日報』。

ina Pilot』第四版（西暦千八百六十四年刊）の英文を譯改して成り、第九卷臺灣の中に尖閣及び「巴西列島」（バシール島）の「伊亞米島」（ヤミ島）を記載する。臺灣附屬島嶼だけに限定された巻ではない。

『海道圖説』の他巻では、英語から漢字に還元される清國內僻地名が多い。Tae Islandsは「臺山列島」、Seven Starsは「七星山」、Pih Quanは「北關港」、Nam Quanは「南關港」など、譯者が清國の地誌と對照して還元したことが分かる。

しかしキング氏原書の尖閣の「Hoapinsu」（花瓶嶼）及び「Tiaiusu」（釣魚嶼）に就いて『海道圖説』は還元せず「和平山」「低牙吾蘇」などの音譯字を充ててをり、清國內とする認識は全く無い。

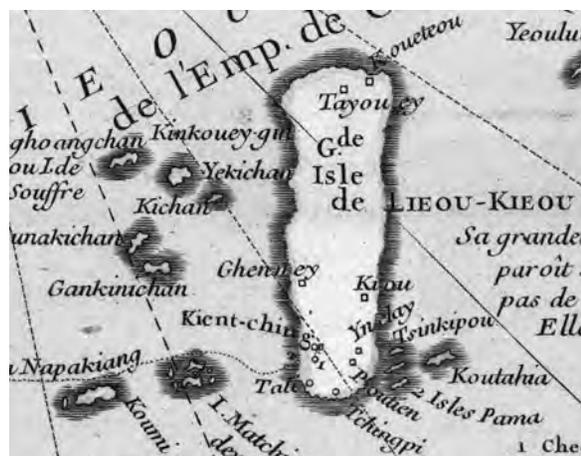
〈ローマ字の清國官話は薩摩まじり〉

西暦千七百五十一年ゴービルは北京で琉球地誌を執筆し、繼いで琉球圖を作成したが（圖版五）、琉球情報が無かったため、清國北方官話字音で琉球各地をローマ字に寫さざるを得ず、甚だしきは和訓の地名おほきみ（大宜味）が官話「Tayouey」となり、Ogimi乃至Ofogimiとならない。薩摩の吐噶喇七島は官話「Tsiitao」となり、日本語Shiitaitoとならぬ。

しかしゴービルの別の原稿の謄寫圖（圖版六）はTsiitaoの傍らに「dependent du Japon」（日本に屬する）と注記し、Tatao（奄美大島）の傍らに「dependent du Roy de Lineou Kieou」（琉球王に屬する）と注記してゐる。ゴービルの清國字音は自身が日本琉球の漢字和訓を知らないことを示すに過ぎず、琉球が清國文化圏に屬することを示すわけではない。

吐噶喇七島以北については早くからポルトガル人・オランダ人が遺した日本地名のローマ字（Tanaxuma（種子島）、Cangoxima（鹿兒島））等があり、ゴービルは清國字音を借用する必要が無かった。

中華人民共和国の諸家はゴービルのローマ字が福建漢字音にもとづくとするが、明らかに無稽の談である。釣魚嶼、黄尾嶼、大宜味について、ゴ



圖版五 Philippe Buache 「Carte du Royaume et des isles de Lieou-Kieou, reduite d'après les cartes manuscrites que le R.P. Gaubil a dressées en Chine le 6 novembre 1752」（西暦千七百五十四年フィリップ・ビュアシユ「琉球諸島國圖、千七百五十二年十一月にゴービルがチャイナで作成した手稿圖より複製」、ラムゼー地圖收藏庫11780013番。davidrunsey.com）

ビルはその中の宜、魚、味をy, vu及びoueyに作り、全て北方官話音である。福建音はそれぞれGI及びGU、BIとなるので妄説に過ぎない。

次に西暦1832年、ドイツ人ユリウス・ハインリヒ・クラブロートがゴービルとは逆に尖閣及び清國地名を日本漢字音で記載する。クラブロートは林子平『三國通覽圖説』をフランスで譯刊し、附録琉球圖の釣魚臺に「Tsioghiotai」（ちよぎよたい）、黄尾山（黄尾嶼）に「Kobisan」、赤尾山（赤尾嶼）に「Sekbisan」と、それぞれ日本漢字音を標する（圖版七）。

尖閣だけでなく、臺灣（たいわん）最北端の鷓籠山は「けいろうさん」、



圖版六 Antoine Gaubli, "2me. (2ème) Carte mste. (manuscrite) du Royaume et des Isles dependantes de Liéou Kieou en Chine dessinée et envoyée à la Bibliothèque du Roy".

(アントワヌ・ゴービル作、「チャイナで製作され王家圖書館に送付された琉球國と屬島、寫本第二圖」。フランス國家圖書館藏稿本。認證番號12148/biv1b84944539。ゴービル手稿にも同じき清書された圖である。「第二」とは琉球主要部の第一につづく東北部の第二圖を指す。

"Tsitao ou 7 isles" (チータオ即ち七島)。
 "Tanaxuma et 7 isles dependent du Japon"
 (種子島及び七島は日本に屬す。)

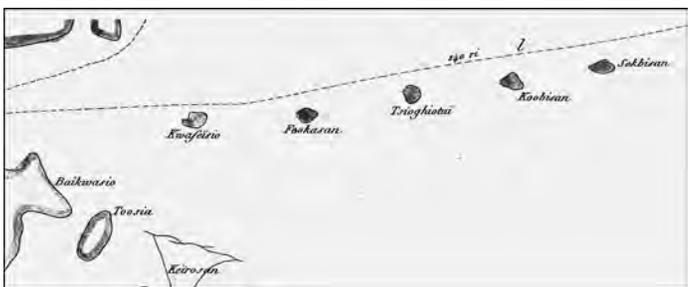
"Ces huit Isles dependent du Roy (Royaume) de Lieou Kieou"
 (この八島は琉球國に屬する)

福州近郊の梅花所は「ばいくわしよ」など全て日本漢字音を採用してゐる。ゴービルもクラブプロトも、漢字音で領土を分ける意圖は無かった。

圖版七

Julius von Klapproth

『San koki tsou ran to sets』
 (三國通覽圖說) 附録琉球圖より、
 尖閣部分。西曆千八百三十二年刊、
 國會圖書館藏。



次に西曆千八百七十一年、米國人サムエル・ウィリアムズ(衛三畏)が冊封使李鼎元の『使琉球記』半部を英譯し、上海の英國王家アジア學會支部紀要に寄稿した¹⁶⁾。その中の釣魚臺が清國字音で「Tiao y u t a i」となっている(原書第百五十三頁)。

しかしサムエル・ウィリアムズは李鼎元『使琉球記』卷三に見える琉球

¹⁶⁾ Samuel Wells Williams 譯「Journal of a Mission to Lewchew in 1801」『Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society』第六冊、西曆千八百六十九年千八百七十年號所載。西曆千八百七十一年上海刊。

神名「開國の天孫氏の神」を「Ka i k w o h t i e n s u n s h i s h i n」として、巻四に見える琉球官名「親方」を t s i n i f a n g とするなど、和名乃至和訓にも清國字音を充てる（第百五十八、百六十二頁）。本意としてウイリアムズの英譯の目的は琉球情報を提供するに在り、その中に釣魚臺が含まれる。一米國人が清國居留中に清國字音を琉球の名詞に充てたからとて清國に屬するわけではない。

次に明治三十四年（西暦千九百一年）、東京帝大教授吉原（徳永）重康の論文「琉球弧の地質構造」では日本漢字音で釣魚島に「Chogyoto」を充て、黄尾島（黄尾嶼）に「Kobito」を充ててゐる。¹⁷ 近年、中華人民共和国は英文中で釣魚島を「Diaoyudaο」としてゐるが、西暦千九百七十年より以前にこの羅馬字は存在せず、西暦千九百八十年代乃至千九百九十年代から普及を試みたに過ぎない。

〈英人の船中の八重山人の知る島名は魚根久場島〉

西暦千八百四十五年に八重山人は尖閣海域に船を案内する能力があり、且つ地元人の尖閣島名があったこと上述の通り。ベルチャーはそれを書き留めなかったが、年代の近い史料若干によってイヨコン・コバシマであったと推測できる。

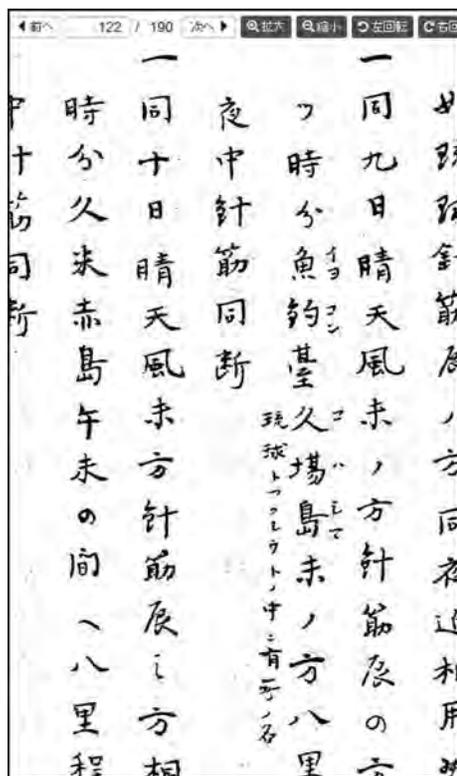
西暦千八百十九年、琉球王親（王族）尚鴻基の船が鹿兒島に北上する途中、はからずも尖閣諸島に漂流し、三日間停泊し、水源を調査し、その後で與那國島に向かった。¹⁸ 與那國の港の高い岡の上では八重山の役人が旗を揮つて船を港へ導いた。與那國島に上陸して後、向鴻基らは先に停泊した島名が魚根久場島だと知った。魚根はイヨコンと讀むこと間違ひない。

西暦千七百九十五年、『下田日記』では琉球人が清國に漂流し、歸途に

¹⁷ S. Yoshiwara 「Geologic Structure of the Riukiu (Loochoo) Curve, and its Relation to the Northern Part of Formosa」(琉球弧の地質構造、兼てフォルモサ北部に關するを論ず)、明治三十四年『東京帝國大學紀要・理科』第十六冊、第七頁。

¹⁸ 内閣官房領土室、尖閣諸島に關する資料の委託調査報告書、平成二十八年年度。

福州から琉球へ向かふ海中で「魚釣臺久場島」を記載する。傍らには日本の假名でイヨコン・コバシマと注する（圖版八）。¹⁹ この日記は釣魚臺を魚釣臺に顛倒してゐることに注意を要する。



圖版八 東大史料編纂所藏『土佐國羣書類從』卷八十二『下田日記』寫本第六十一葉。認證番號0005911、請求記號2041.84-20。

西暦千八百六十年、琉球の役人蔡大鼎は清國に朝貢のため渡航する途中、八重山と尖閣を経て馬祖列島の竿塘に至る。船が尖閣を経由した時、蔡氏詠じて曰く…

「回頭北木白雲裏、魚釣臺前瞬息過。」
 （平仄仄仄仄仄仄、平仄仄仄仄仄仄。
 回頭す北木白雲のうち、魚釣臺前瞬息に過ぐ。）

¹⁹ 東洋文庫藏寫本同じ、請求記號：貴重書II-13-1013。國立公文書館218-13號寫本は「イヨコン」に作る。詳しくは内閣官房領土室、尖閣諸島に關する資料の委託調査報告書、令和元年度。國會圖書館218-2-55號寫本は「イユコシ」に作る。

と。句中では釣魚を顛倒して魚釣とすること『下田日記』と同じである。頭の字は平聲で仄聲釣字を以て對するのが顛倒の目的だが、しかし地名は隨意に顛倒して良いわけではない。琉球人中に先に「魚釣」の名があつてこそ始めて平仄の調節に用ゐることができよう。問題は琉球人が魚釣臺の三字をどう讀んだかである。うをつりだいと讀むとすれば、今の魚釣臺の名から轉じたことになるが、それは明治中葉に日本政府が尖閣を調査した時にやつと出現した新島名である。蔡氏よりも前の『下田日記』が既に魚釣臺をイヨコンと讀んでゐる以上、蔡氏の讀み方も同じ筈である。蔡氏の詩句は「魚釣臺」の書き方とその元となつたイヨコンの讀み方がともに琉球で一定の普遍性を持つてゐたことを示す。

千八百十九年、千八百四十五年、千八百六十年の三度ともに尖閣八重山間の航路であり、その内の二度の島名がともにイヨコンであれば、千八百四十五年の八重山船員の認識中の島名も最も可能性のあるのは矢張りイヨコン・コバシマであらう。

〈魚根の淵源〉

西曆千七百九十五年『下田日記』のイヨコン・コバシマ（魚釣臺久場島）は國吉まこも氏が最初に論及し、²⁰ 現在すでに内閣官房領土室委託調査報告書に収録されてゐる。²¹ その意義は極めて重く、上下六百年の尖閣史の主軸を定めたと言へる。

先づ留意すべきは『下田日記』が徐葆光『中山傳信錄』を参照した点である。²² 『下田日記』の魚釣臺は『中山傳信錄』の釣魚臺から轉化してゐる。日記中では清國地名を多く記載し、往往最新の北方官話字音を傍注する。

²⁰ 國吉まこも「尖閣諸島について」、平成三十（二千十八）年三月二十六日講演、日本國際問題研究所。

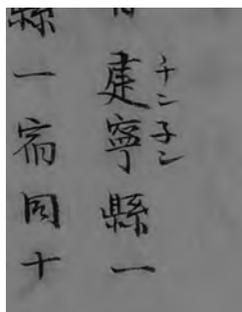
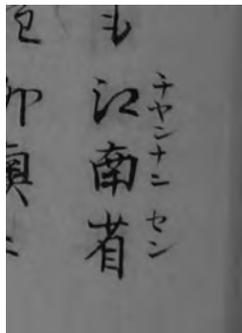
²¹ 内閣官房領土室、尖閣諸島に關する資料の委託調査報告書、平成三十一年度。

²² 『土佐國羣書類從』卷八十二『下田日記』活字本第二百六十五頁に見える。高知縣立圖書館編、平成十年刊。

建寧はチンネンとなり、江南省はチャンナンセンとなる（圖版九）。一行中には通事伊良皆親雲上、唐名鄭崇基が含まれ、これらの官話音は通事が述べたものだらう。假に琉球人が『中山傳信錄』の釣魚臺も清國の地名だと思へば、清國音を注した筈で、和訓の假名を注することはない。

凡そ漢文地名は通常音讀するのみで和訓しない。例へば長安は「ちゃうあん」であり、「ながやす」とは讀まない。赤壁は「せきへき」であり、「あかかべ」と讀まない。『下田日記』が『中山傳信錄』の釣魚臺をイヨコンと讀んだのは和訓であり、今一つの和名久場島と連なつてゐる。琉球人の認識としては琉球に先に和名イヨコンがあり、後に釣魚臺と漢譯され、『中山傳信錄』に載つたのである。

圖版九 『下田日記』寫本より、建寧（チンネン）及び江南省（チャンナンセン）。葉次無し、國立公文書館218-13。



第二に『下田日記』及び尚鴻基『向姓家譜』中でイヨコンには「シマ」（島）を加へず、コバシマにだけ後ろに「シマ」を加へてゐる。これはイヨコンそのものに島嶼の義が含まれ、屋上屋を架する必要が無いのだから。八重山研究の泰斗宮良當壯の説ではイヨコンのイヨを古語のウヲとして、コンはクニの琉球轉音であり、併せてイヨコンは魚國となり、漁産に富む場所となる。²³ 宮良説ではコンそのものが場所であり、イヨコンに「シマ」

²³ 昭和十三年、幣原坦「南方文化の建設へ」（富山房）第六十五頁に引く宮良當壯の語。

を加へない理由を解釋し得る。同じ理で『下田日記』の魚釣臺三字でも臺は場所であるから島の字を追加しなくて良い。

沖縄縣の地名は阿波根（あはごん）、手登根（てごん）、比屋根（ひやごん）などで根（ごん）を尾とし、粟國（あぐに）、與那國（よなくに）、宮國（みやくに）などで國を尾とする。根・國はともに場所を示す語尾と考へられる。魚根も例證の一種に算へ得よう。

魚根に島を加へず（加へても可）、久場島に必ず島を加へ、兩者を繋げて記載する形式は、史料中で以下のやうに一貫した系列となつてゐる。

西暦千七百八年、

琉球程順則『指南廣義』…釣魚臺、黄尾嶼（黄麻嶼・黄毛嶼）

西暦千七百十九年、

清國徐葆光『中山傳信録』…釣魚臺、黄尾嶼。

西暦十八世紀前半、

佚名『指南正法』…釣魚臺、黄尾嶼。

西暦千七百五十一年、

琉球家譜三種…釣魚山、久場島山。

（麻姓家譜瀨底家、柯姓家譜國吉家、鄭氏家譜與座家）

西暦千七百九十五年、

土佐藩『下田日記』…魚釣臺、久場島。

西暦千八百十九年、

琉球『向姓家譜・具志川家』…魚根、久場島。

西暦千八百三十八年、

清國林鴻年（趙新『續琉球國志略』引）…釣魚山、久場島。

西暦千八百六十六年、

清國趙新『續琉球國志略』（卷二）…釣魚山、久場島。²⁴

²⁴ 島名史料の出處詳細は、國吉まこも「尖閣諸島の琉球名と中国名のメモ」、沖縄大學地域研究所『地域研フォーラム』第四十號、頁次無し、平成二十五年一月。

右に擧げる西暦千七百五十一年の琉球家譜の釣魚山と久場島山は特徴が二點ある。その一は、島と山が重複して島字で和名シマを表はし、山字で漢文の島嶼の義を表はす。ここから分かるのは、久場島はもとからシマが附帶し、釣魚山はもとからシマが附帶しない。この二者は琉球和名イヨコン及びクバシマであらう。

その二は、二者は一つに連なる群島名となつてゐない。琉球家譜の該條に曰く、

「風に随つて飄蕩し、幾ど釣魚山の礁を衝かんとす。

（中略）漸く久場島山に近づく。」

と。句中で釣魚山が一島、久場島山が別に一島である。イヨコンは久場島の冠前形容詞ではなく、單獨の一島であり、宮良氏の場所説は暗に證せられる。

釣魚嶼の最も早い記載は西暦千五百三十四年陳侃『使琉球録』であり、西暦千七百八年『指南廣義』に至つて釣魚臺が出現し、その後多數の史料は臺に従ひ、嶼に作らない。嶼を臺と改めた原因は、一貫の系列から見ればイヨコンが場所の義を含んでゐるため嶼を棄てて臺に従つたのではないか。さればイヨコンの名は西暦千七百八年或は更に前まで遡り得る。慎重な基準でも琉球の程順則『指南廣義』が初見となり、清國人の命名ではない。『指南正法』は民間の針路寫本であり、書中の干支からは成書年代を確定できないが、だた書中の「長崎」の書き方は、情報の年代の早さを反映してゐる。

全書はほぼ三大部分に分け得る。第一部分は航海術を述べ、第二部分は針路古本であり、第三部分の多くは新たに添加した針路である。第二部分で長崎を多數記載するが全て「長岐」に誤り、第三部分では全て長崎に改める。漢字の崎と岐とは同音で和訓のみ異なり、崎は「さき」、岐は「わかれる」だが、勿論崎が正である。

第三部分のこの修正は西暦千六百八十九年に幕府が長崎唐館を開設して以後の新たな状況を反映してゐるだらう。西暦千六百八十四年に臺灣鄭氏が滅

亡して以後、長崎に來航する唐船が劇増して唐館の需要が出て來たのである。
 第二部分と第三部分との章分けは原寫本第四十葉「普陀より長岐に往く針」の條に在る。條中の前半は長岐に作り、後半は長崎に作る。後半は日本地名を列記すること破格に多く、概ね閩南音にもとづく²⁵。今例を挙げれば左の如し（圖版十）。

²⁵ 閩語で参照するのは陳章太・李如龍『閩語研究』（語文出版社平成三年）第十頁對照表、及び臺灣大學・中央研究院共同製作「漢字古今音資料庫」<https://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/cor/>

温二、温裕（ウンジ、宇治列島）

野馬居沙（ヤマコサ、天草）

審馬巴哪（審馬巴哪、シンマパナ、島原）

一枝花（一枝花、イチヤホア、諫早）

長崎

旺浮郡（旺浮郎、オンプラン、大村）

魚鱗島（ヒラント、平戸）

隴居仔

（ランコア、名護屋）

或見温二用单癸及壬子取天堂北頭過用子癸收入若在天堂南頭過用乾亥收入妙也

或貪南見七島用壬子七更取温裕

或設子馬用乾亥三更見友刀帽单亥取天堂或貪北見高麓山用辰癸十一更取五島单寅收入港

入港或見水甚馬癸巳五更取五島单寅收入港

温二直隴即是設子馬地界沿山使上見桃里馬、上是阿金美、上是土舊灣、内有白

沙波沿山使上是京泊洋、上是阿九根、上是野馬居沙、上四更洋審馬巴哪、上是

一枝花、上是長崎、上是旺浮郡、上是魚鱗島、上是隴居仔、上是花脚踏、

圖版十 『指南正法』第四十葉、「普陀往長岐針」條、長崎の始めの箇所。香港中華書局『針路藍縷』第二百六十四頁、平成二十七年影印オックスフォード藏原寫本。

花脚踏

(ホアカタ、博多)

このうち島原、諫早、長崎は一路橘灣内を經由する(長崎縣の灣名)。この様に岸に迫って航行し且つ地名を確認するのは、島原天草の亂後の鎖國時代(西曆千六百三十八年以後)ではほぼ不可能なので、この條は明らかに前代の遺文であり、書中の第二部分に屬するだらう。この條の後半の長崎は長岐に作らないが、筆寫の過程で次條の長崎に干渉されて書き換へたのだらう。次條以下、長崎はいづれも長岐に作らないので、第三部分の新時代に屬するだらう。

『指南正法』の釣魚臺は書中の第二部分に見え、年代の早さは長崎唐館開設以前、乃至鎖國以前であらう。琉球の民間に先に釣魚臺なる譯名があり、その後で『指南廣義』及び『指南正法』に記載されたと考へられる。文人が太公望の釣魚臺の故事を引いて嶼を臺に改めたのではない。よつて琉球和名イヨコンに嶼を加へない形式の出現した年代もこれに隨つて西曆十七世紀中葉まで引き上げ得る。

〈魚根、久場島、赤島の名義は釣魚嶼、黄毛嶼、赤嶼に符合〉

尖閣諸島中、琉球和名魚根及び赤島(イヨコン及びアカシマ)と、最古の陳侃の釣魚嶼及び赤嶼とは、語義が暗に符合し、相呼應してゐる。ただ久場島と黄毛嶼との相關だけは不即不離で、考索を費やさざるを得ない。魚根・赤島で語義を取る以上、久場島(こばしま)も語義を主とし、併せて字音を考へるべきである。

琉球の島名は往往「ま」を尾とする。例へば慶良間(けらま)、波照間(はてるま)、多良間(たらま)、加計呂麻(かけろま)、鳩間(はとま)等、各地に概見する。和語「ぬま」(沼)、「はま」(濱)、「やま」(山)、「しま」(島)、「くま」(隈)、「そま」(杣)はともに場所の義を含んでをり、琉球

の和語の淵源の遼古なるを知り得よう。²⁶

コバ即ち蒲葵は、棕櫚椰子類の常緑樹で、日本の標準語中では枇榔(びらう)となる。明治年間に久場島には蒲葵の樹林が存在した。²⁷ 棕櫚椰子類の植物は琉球群島では蒲葵が最も常見で、他の同類植物は野生が極めて少ない。琉球文化の始原を考へるに、平安後期の西曆十一、十二世紀、律令體制解體後に武士が海に入つて賊となり、南下して琉球具足城(ぐすく)文化を草創したのである。平安期以前の飛鳥宮、平城京の兩期に日本では尚ほ花見の文化が乏しく、『萬葉集』でただ花と言へば往往梅花を指すのは海西の新物種ゆゑである。『古今集』に至つて花と言へば櫻を指すやうになつた。これは中學古文課程の基礎知識である。

『萬葉集』すら且つこのやうであるから、南下武士が琉球の蒲葵の黄なる花を見れば、必ずしも花と思はないだらう。我々が現在植物知識に乏しければ蒲葵の花を見て一目では花だと知らず、善く辨じない者は一種の鮮黄なる群葉乃至黄毛かと誤解し得る(圖版十一)。利那の後に棕櫚椰子類の花はみなかかるものと思ひ至り、やつと認知中に受け容れることとなる。和語中では凡そ開始的な、周縁的な、表面的な、尖端的な、耀かしい、躍動的なもの多く「は」を語頭とする。例へば生える、映える、端(はた)、旗、恥、膚(はだ)、裸、花、放つ、離れる、羽根、跳ねる、走る、濱、原つぱ、速い、拂ひ捨てる、針、張る、春、晴れ姿、等等がある。

和語「は」には端、羽、刃、齒、葉等の漢字があり、みな周縁・稜線の義を有する。和語「はな」は端、鼻、花の三種の書き方があり、みな前面凸出の義より出る。されば花と葉とは古義相通するのである。

²⁶ 徐葆光『中山傳信錄』卷四「琉球三十六島」に曰く、「中山、問字を讀むこと、音、麻に同じ、華言山なり」と。參照：金城朝永「地名(沖繩)の起源について」、『金田一博士古稀記念言語・民俗論叢』、第三百三頁、昭和二十八年、三省堂。外間守善『沖繩学への道』第三百二十一頁「鳩間島に架ける夢」、平成十四年、岩波書店。

²⁷ 宮嶋幹之助「沖繩縣下無人嶋探検談」、『地學雜誌』明治三十三年(西曆千九百年)、第十二卷、第十號、第五百八十九頁。

「黄」は和語中で「き」と讀むが、古代では往往「こ」音となり、黄金（こがね）が最も著名である。同じ理で「木」も「き」と「こ」とで互ひに轉じ、木立（こだち）、木漏れ日（こもれび）、木の葉（このは）、木枯らし（こがらし）等の例が少なからずある。

『海東諸國紀』卷首「琉球國之圖」に奇羅波城があり今の久良波（くらは）として沖縄島の中部西岸に位置する。奇を「く」とするのは古語「奇すし」（くすし）の例に倣ったか確定できないが、琉球で「き、く、こ」が相通することを證するにはこれを借り得よう。よって鄙見ではコバの語源は黄葉、黄花であり、琉球人が譯した漢文が黄毛となったのであらう。

圖版十一

コバの花。

ウイキペディアより。



〈久場島は黄尾嶼と字音でも通じる〉

漢文中、西暦千五百三十四年陳侃『使琉球録』に琉球人の導航下で黄毛嶼がはじめて見え、西暦千五百五十六年鄭舜功『日本一鑑』では黄麻嶼に作る。麻は麻の異體字である。西暦千五百六十一年鄭若曾『籌海圖編』では黄茅嶼に作る。西暦千六百六年夏子陽『使琉球録』に至って黄尾嶼が出現する。黄麻及び黄茅はともに枯れた草本であり、蒲葵といふ常緑高樹には似てゐない。尾字は閩粵沿海地名に頻見し、倭寇の用字に出ると考へられ、草木には關はらない。

毛、麻、茅は等韻三十六紐中とともに明紐に屬し、通常はm音となるが、

福建では多くb音に作り、往往麻をbaと讀み、茅をbauと讀む。毛は閩南の大部分の地域でm音に屬するが、漳浦でbng、北寄りの大田縣でbungとなる。閩南以外に擴げれば福建中部の沙縣でboとなる。明紐をbと讀むのは唐の長安と共通であるが、長安古音の遺留とは言へず、ただ福建口語の古態であることは間違ひない。尾は微紐に屬し、閩南で往往bueと讀むのを補證として加へることができる。これら四字は音が相似ながら、字義はそれぞれ異なる。

琉球和語で蒲葵はコバともコボウとも呼ばれる。琉球正史『中山世鑑』卷一「琉球開闢之事」によれば、最初の御嶽（古琉球の神社）の第七社は久高島のコバウ御嶽であるが、音はコボウと同じで、蒲葵の森の御嶽を意味する。

西暦十六世紀以前の古琉球期、琉球語はまだ漢字を常用しなかった。著名な『おもしろさうし』及び古辭令書²⁸がともに平假名を主とすることからも一斑を窺ひ得る。漢字を書かない以上、福建と往來するには自づと福建字音を充てることとなる。兄（しぎ）を師惹に作り（『皇明實録』洪武十三年十月）、國頭（くにかみ）を吳宜堪彌に作る（『皇明實録』洪武二十九年四月）など多々ある。これらと異なる赤島、久場島等の「和訓」書法は晚い年代の産物であらう。

黄字については、等韻で匣紐に屬し、今の閩南で一般的にhongと讀み、コバの音に合致しない。しかし日本の古語で「はひふへほ」はPA、PI、PU、PE、POと讀み、早期にはまだHA、HI、FU、HE、HOに轉じてゐなかつた。H音が無いため、古人はHをKとすること卑彌呼（ひみこ）の例の通りであつた。琉球は日本の古音Pを保存してをり、中世でもPであつたから、その時の人々が福建のH音を聴けばK音となり得ただらう。琉球通事のコボウを閩南音で漢字に書けば字義に合はせて黄

²⁸ 古辭令書の蒐集は『辭令書等古文書調査報告書』に見える。沖縄縣教育委員會、昭和五十四（西暦千九百七十九）年。

毛としたかも知れない。

しかのみならず、凡そ匣紐は閩南に於いて書面でHと読み、口語でKと読むこと、上古のG音の遺留である。福建以外では廣東で繪をクイと読み、蘇浙で環をグエと読むのは同じ法則であり、福建ではそれが特に多い。

閩南口語で匣紐をKに読むのは左の通り。括弧内は韻圖の等第である。

閩南多地域で、

寒汗（一等）…カン、コアン。

含（一等）…カム、コアン。

厚侯猴（一等）…カウ。

糊（一等）…コー。

環（二等）…クワン。

行（二等）…キヤン。

鹹（二等）…キヤム。

縣懸（四等）…クイン、クワン。

漳浦で、

下（二等）…ケー。

廈門で、

號（一等）…コー。

繪（一等）…クエ。

懷（二等）…クイ。

これらの字は等韻の開合一二四等に遍く分布し、三等も群紐に入つてKとなるのが通例である。よつて匣紐は閩南で全て歴史上でK音に讀まれたことがあると言へる。そのうへ字源の聲符が一致し得る還・旱等も、今音をKと讀まぬもののKに類推できる。

この規則性にもとづけば、黄字も閩南の歴史上でk o n gと讀まれたことがある筈となる。黄と共通の聲符及び聲紐を有する字としては「擴」があり、閩南でこれをKと讀む例は無いものの、閩北の建甌（舊建寧府）でクワンの次清となる。さらに潮州・廣州で擴字はそれぞれ「クワン」「コン」

の次清となるのも参照して良いだらう。されば六百年前に閩南人が黄毛をコンボウと讀んで琉球のコボウに近似してゐたとしても、あながち誤りではなからう。（上篇終）